

古英語の関係節における Case Attraction について

内田 脩平

1. 導入

古英語期の関係節において、(1)のように指示詞の関係代名詞と不変化詞 *þe* が共起する場合、関係代名詞の格は関係節内の文法関係で決まるのが一般的であった。(1)では関係代名詞 *þa* は関係節内の文法関係である主格で屈折している。

- (1) Palladius biscop wæs ærest sended to Scottum *þa* þe on Christ gelyfdon
Palladius bishop was first sent to Scots who that in Crist believed

‘Bishop Palladius was first sent to the Scots, who believed in Christ’ (Bede 46.30/宇賀治 (2000: 246))

しかし、関係代名詞の格が、関係節内の文法関係を無視し、先行詞の格と一致する場合があった。(2)では関係節内には主語の空所があるが、関係代名詞 *þone* は下線で示される先行詞の格と一致し、対格で屈折している。このような現象は Case Attraction と呼ばれる。

- (2) heriað forði Drihten þone ðe earðað on Sion
praise therefore Lord whom that lives in Zion

‘Praise therefore the Lord, who lives in Zion’ (Fragments of Psalms 9.11/ Traugott (1992: 225))

本稿では、歴史コーパスから得られたデータを基に、古英語期の Case Attraction は非制限用法の関係節で見られる現象であると主張し、その統語派生を提案する。

2. データ

表 1 では The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose (YCOE) と The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second Edition (PPCME2) から得られた Case Attraction の時代ごとの生起数を示している。Case Attraction が可能な *se þe* 関係節は古英語の最初期から中英語の初期まで見られるが、Case Attraction は古英語期にのみ観察される。

表 1 Case Attraction の生起数¹

	O1	O2	O3	O4	M1	M2	合計
Case Attraction	0	34	19	1	0	0	54
<i>se þe</i> 関係節	3	822	920	109	14	0	1868

さらに、表 2 では Case Attraction の 54 例の内、非制限用法の件数を示している。3 種類の非制限用法として、(a) 先行詞の前の決定詞が *his*, *John’s* などの属格名詞句であるもの、(b) 先行詞が固有名詞などの特定のなもの、(c) 関係節の前にコンマの区切りのあるものに分類している。² Case Attraction の全 54 例の内、51 例が非制限用法であり、Case Attraction は非制限用法の関係節に生じる現象であると考えられる。

表 2 Case Attraction における非制限用法

非制限節の種類	O2	O3	O4	合計
a.	12	6	1	19
b.	11	8	0	18
c.	9	4	0	24
合計	32	18	1	51

3. 提案と分析

本稿では De Vries (2006) の提案する非制限用法の関係節の分析を部分的に採用し、非制限用法の関係節は空の DP を含む構造を持つと提案する。De Vries は (3a) の非制限関係節に対し、先行詞と空の DP が等位接続される (3b) の構造を提案している。

- (3) a. John, who I know well
b. [_{CoP} [_{DP1} John] & [_{DP2} N+D (∅)] [_{CP} [_{DPrel} NP D_{rel} (who) NP] C [_{TP} I know DP_{rel} well]]]

(cf. De Vries (2006: 230))

彼は Kayne (1994) や Bianchi (1999) らによって提案された関係節の繰り上げ分析を仮定しており、関係節 TP 内から DP_{rel} が CP 指定部に移動する。その後 DP_{rel} 内において NP が DP 指定部に移動し、更にその主要部 N が

関係節 CP を補部に持つ D へと移動する。このようにして形成された N+D の複合体を主要部とする DP が先行詞と等位接続されている。また、Co(ordination)P の主要部が空のスペルアウトを与えられると仮定されている。以上の分析を部分的に採用し、本稿でも非制限関係節には先行詞と等位接続された DP が存在し、関係節 CP はその DP に付加されていると仮定する。そして、古英語において指示詞がその DP の位置に生じることによって Case Attraction が派生されると主張する。本稿の提案する Case Attraction の構造を(4)に示す。(4)では関係代名詞 þone は先行詞名詞句と等位接続され、関係節 CP 内では空演算子が CP 指定部まで移動する。指示詞の格は等位接続された先行詞と同じ格となり、Case Attraction が派生される。

(4) [CoP Drihten & [DP þone] [CP Op_i ðe [TP t_i eardað on Sion]]] (=2)

一方、(1)に示されるように、同じ非制限関係節の環境でも Case Attraction 自体は義務的な現象ではない。この随意性は(5)の構造により説明される。

(5) [CoP Scottum & [DP Ø] [CP þa_i þe [TP t_i on Christ gelyfdon]]] (=1)

Case Attraction が起こらない場合は、先行詞名詞句と空の DP が等位接続され、関係代名詞は関係節内から CP 指定部へ移動する。したがって、関係代名詞の格は関係節内の文法関係で決められる。

4. 結語

本稿では古英語期に見られる Case Attraction が非制限用法の関係節の現象であることをコーパス調査により明らかにし、その統語構造を提案した。関係代名詞が先行詞と等位接続される場合に Case Attraction が生じ、一方、Case Attraction が生じない場合は、空の DP が先行詞と等位接続され、関係代名詞が関係節内で移動すると主張した。

注

¹ YCOE, PPCME2 の時代区分は O1 (-850)、O2 (850-950)、O3 (950-1050)、O4 (1050-1150)、M1(1150-1250)、M2 (1250-1350)である。

² 中尾(1972)や岩田(2012)は、初期の英語では、制限・非制限を区別する基準としてコンマの有無は有効ではないとしているが、本稿ではコンマの有無以外により判別ができない事例に限り、(c)の基準を採用している。

³ Bianchi (1999: 94-96)は Case Attraction は関係節の wh 移動分析ではなく、繰り上げ分析を支持する証拠であると主張している。仮に、関係節が一律に wh 移動で派生され、関係節 CP が先行詞 DP に付加されており、格付与には C 統御が必要であるとすると、CP 指定部にある関係代名詞は先行詞と同じ要素から格付与されることはできないからである。しかし、通常の繰り上げ分析では、格付与が関係節内と移動先で 2 回行われるという問題、また Case Attraction が義務的に起こると予測してしまうという問題が残る。

参考文献

Bianchi, Valentina (1999) *Consequences of Antisymmetry: Headed Relative Clauses*, Mouton de Gruyter, Berlin.

岩田良治 (2012) 「古英語の限定関係節構文の統語形式再考」『天理大学学報』第 63 巻第 1 号, 49-64.

Kayne, Richard (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.

中尾俊夫 (1972) 『英語史 II』英語学大系第 9 巻, 大修館書店, 東京.

Traugott, Elizabeth C. (1992) “Syntax,” *Cambridge History of the English Language* vol.1, ed. by Richard Hogg, 168-286, Cambridge University Press, Cambridge.

宇賀治正朋 (2000) 『英語史』開拓社, 東京.

De Vries, Mark (2006) “The Syntax of Appositive Relativization: On Specifying Coordination, False Free Relatives, and Promotion,” *Linguistic Inquiry* 37, 229-270.

コーパス

Kroch, Anthony and Ann Taylor (2000) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*, Second Edition (PPCME2), University of Pennsylvania, Philadelphia.

Taylor, Ann, Anthony Warner, Susan Pintzuk and Frank Beths (2003) *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose* (YCOE), University of York, York.